

看護系 4 年制大学における老年看護学臨地実習の実態と課題

清水 初子¹⁾

水戸美津子¹⁾

流石ゆり子¹⁾

要 旨

本研究の目的は、看護系 4 年制大学の老年看護学臨地実習の実態と今後の課題を明らかにすることである。研究方法是郵送によるアンケート調査。対象は老年看護学臨地実習担当者である。調査の結果、以下のことが明らかになった。

1. 老年看護学臨地実習の場所としては、老人保健施設、特別養護老人ホーム、老人専門病院を選定している大学が多かった。
2. 老年期の人々への働きかけは、その人の価値観を尊重し、生活の質の維持向上をめざすことにあるので、そのことに学生が気づけるような実習施設の選定が必要である。
3. 教員が臨地実習で大切にしていることは、「高齢者の理解」と「多職種との連携の中で看護の本質的な役割機能を学ぶ」であった。
4. 老年看護学臨地実習の指導体制上の悩みは、実習場所までの距離の長さや複数の施設を使用するための教員の不足であった。
5. 他領域の教員との共通認識の困難性が明らかになった。

キーワード：老年看護学臨地実習、実習施設、生活の質、高齢者理解、多職種との連携

I. はじめに

わが国の人口の高齢化は世界に例を見ない速さで進んでおり、65歳以上の高齢者は人口の16.2% (1998年 9 月15日現在：総務庁) となった。このため高齢者の健康障害や慢性疾患に対する看護・介護への期待が高まっており、適切な対応が求められている。

看護基礎教育では、1990年に老年看護学が独立科目としてカリキュラム上に位置づけられた。これは、老年人口の圧倒的増大と従来の成人看護の延長上や成人看護方法の枠の中では対応できないことが理解されはじめたからである。また、高齢化の進展に伴い、看護サービスの拡充、看護職員の資質向上の必要性を背景に、1997年カリキュラムの改正がされ、病院での実習のみならず、あらゆる場で患者、家族等に接する実習を推進するた

め、「臨床実習」が「臨地実習」と改められた。これに伴い実習施設も老人保健施設、訪問看護ステーション、在宅介護支援センター、市町村保健センターなどに拡大されている¹⁾。

老年看護学は独立の専門領域となってから 9 年が経過したに過ぎず、看護学の中では歴史はまだ浅く、教育内容の精選と教育方法や実習の場の検討など多くの課題を抱えている^{2) 3)}。看護基礎教育における老年看護の学士課程で押さえないといけない教育内容について太田は⁴⁾、高齢者の理解と高齢者を取り巻く社会の動向に関するもの、高齢者への働きかけの特徴に関するものを挙げている。また、教育方法について田島²⁾は、老人は青年・壮年の単なる延長線上にあるものではないということや、生活に視点を当てた教育の必要性を指摘している。このため、教育方法を模索した

(所 属)

1) 山梨県立看護大学

(専攻分野)

老年看護学

研究が幅広く行われ、学生の老人観に着目した研究⁵⁾や高齢者のイメージに関する研究が老年看護教育を充実させる目的で行われている^{6)~12)}。また、教育形態の一つである老年看護学臨地実習に関する研究では、実習内容や学生の学びに焦点を当てた研究が多い^{13)~20)}が、いずれも3年の看護教育課程に在学中の学生を対象としているものであり、大学での老年看護学臨地実習についての報告は少ない^{21)~24)}。

そこで、本研究においては全国の看護系4年制大学の老年看護学臨地実習に焦点を当てて、実習の実態を調査し、老年看護学臨地実習の課題を明らかにする。これは、新設である当大学において、老年看護学臨地実習の今後のあり方を検討するための基礎資料とするためである。

なお、老年期にある人々の呼称は、老人、高齢者、老年者、お年寄りなどあるが、本研究では文献を引用するとき以外は高齢者を用いた。

Ⅱ. 文献考察

ここ数年、看護系4年制大学が相次いで創設されているが、老年看護学臨地実習が開講まで至っていない大学が多いと予測されるため、1988年~1997年までの大学、短期大学における老年看護学臨地実習がタイトルにあがっている文献を検索し、考察した。それらを実習施設別に分類すると、特別養護老人ホーム5件、老人保健施設5件、訪問看護ステーション2件、高齢者通所サービスセンター1件、老人専門病院1件、一般病院1件の計15件であった。

特別養護老人ホームは“終のすみか”といわれるように、入所者の生活への支援を中心に看護が行われている。ここでの学生の学びについて、古城¹⁴⁾らは、「居室はタンスやマット、生け花など家庭的な明るい雰囲気があり、施設内が生活の場であり、家庭の延長であることが理解できたことや障害にあわせたケアの工夫に気づいている」と述べている。また、吉尾¹⁶⁾は、福祉施設における実習で5割から7割の学生が、老人の意思を尊重する事の大切さ、残存機能を生かした日常生活援助の必要性についても学んでいると述べている。

大淵¹³⁾は、「学生が職種間の連携によるチームケアが実施される場面を通し、高齢者のケアには連携による総合的なケアが不可欠であることや看護の果たす役割や質が問われていることを実感している」と述べている。このように、特別養護老人ホームの実習では学生が、生活中心の看護を学び、高齢者の看護を生活の視点でとらえることの重要性に気づいたり、多職種の中で改めて看護について考える機会となっている。しかし、施設から在宅への継続性を理解することが不十分であるとの指摘もあり¹⁴⁾、家族や地域とのつながりについては学び難い実態もある。

老人保健施設は家庭復帰を目指した、医療と看護及びリハビリ主体の施設であり、地域と医療機関の“中間施設”である。伊藤²⁴⁾はここでの学生の学びについて、生活援助を体験する中で、個性を考慮した看護の重要性和難しさに気づいていること、施設利用者を中心に職種間で協力して生活援助を行っていると述べている。古城¹⁴⁾は、学生に在宅ケアに関する問題意識が芽生えが見られたとし、家に帰っても高齢者の自立への視点が看護専門職者になれば寝たきりになる危険性があることから、学生は高齢者の在宅ケアに関する知識の普及、福祉サービスを活用するための啓蒙の必要性に気づいていると述べている。また、老人保健施設の場合、入所時から退院先がほぼ決まっていることが多く、学生は、家庭復帰を目指す施設にもかかわらず、現実には家庭での介護困難の利用者が多いことにも気づいていると述べている。老人保健施設での実習について、鳴海²⁵⁾は、「老人保健施設は老人自身の自立に向けて努力している場、ケア中心で、老人とゆったりかかわりながら老人を知ることができる場として、適切な実習場である」と述べ、中田²⁰⁾も老人保健施設は「在宅療養になった場合どのようなことが問題になるか予想しながら施設内での看護・介護を考えていく学習に適している」と述べている。このように、老人保健施設は病院と地域との架け橋であり、家庭復帰を目的とした中間施設で、自立を支援した日常生活援助を学ぶのにふさわしい場であると考えられる。

老年看護学の対象となる高齢者は、健康レベルに応じて生活の場が地域から施設へ、施設から地域へと変化する。このため野川¹⁵⁾は、老人・家族の自立とQOLをめざし、老人訪問看護実習を取り入れ、寝たきり・痴呆老人・ターミナルケアを必要としている人を選定している。訪問看護ステーション、高齢者通所サービスセンターなどの実習では、在宅高齢者や家族の実態を理解することや高齢者の在宅支援サービスの内容と具体的なサービスの提供方法、家族支援の実際などを学ぶ機会となっている^{13) 14)}。学生はデイケアやデイサービスセンターの実習を通し、利用している比較的元気な高齢者とふれあうことで、健康レベルの違いによる生活の質の違いに気づいている。デイサービス、訪問看護ステーション実習では、施設が独立して地域の中にあるのではなく、地域ケアを担う一つの拠点として位置していることを学ぶ機会になっている^{13) 14) 15)}。

病院での実習に関して、大淵¹³⁾は、病院という場で提供される高齢者への看護では、病院の性質上、診断や治療が優先されることが多いこと、そのため老年看護の中心的な課題である生活志向の看護が学びがたいことを指摘している。一方、医療施設での実習において、「リハビリ拡大を図ろうとして援助計画を立てても、毎朝新たな問題が出現していて、リハビリが全然進まない」ことから、高齢者は成人のように法則性が通用しないこと、高齢者の経過を予測する難しさを学んでいるという報告もある。²³⁾

以上、文献から実習施設別に老年看護学臨地実習の学びや問題について検討した。これによって老年看護学臨地実習が様々な場で実施されていること、場によって学生の学びの内容に差があることが明確になった。さらに、教員は、老年看護学臨地実習で学ばせたいこととして、「高齢者の理解」「これからの高齢社会に向けての看護の果たす役割と機能の拡大の理解」を挙げていることがわかった。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査票の作成

文献考察をもとに、全国の看護系4年制大学の老年看護学臨地実習について、20項目からなる調査票を作成した。

1) 調査の項目

- ①老年看護学担当者（4項目）
- ②老年看護学臨地実習の総単位と総時間数（1項目）
- ③老年看護学臨地実習の実施時期および学生（3項目）
- ④老年看護学臨地実習の施設と実習期間（2項目）
- ⑤老年看護学臨地実習中に、学生が直接関わる事が可能な職種（1項目）
- ⑥老年看護学臨地実習の指導体制（3項目）
- ⑦老年看護学臨地実習を行う上での困難なこと（4項目）
- ⑧老年看護学臨地実習を担当している教員が指導に際し大切にしていること（1項目）
- ⑨老年看護学臨地実習の展開の中で日頃感じていること（1項目）

2) 調査票の内容の妥当性

調査票の内容の妥当性と調査への適正をはかるため、本調査の前に2名の老年看護学担当者が記述した調査票をさらに検討し、質問内容や質問方法などの修正を行った。

2. 調査方法

1) 調査の依頼と発送

全国の看護系4年制大学49校に調査を依頼した。調査票は、各大学の老年看護学担当者宛に郵送した。

2) 調査実施期間

平成10年7月30日～9月16日

3) 調査票の回収

回収した調査票は、31通、回収率66.3%であり、有効回答数は24通、有効回答率は77.4%であった。なお、有効回答率が低くなったのは、老年看護学臨地実習未開講や老年看護学講座として独立していなかったり、実習の展開において、老年・成人看護学臨地実習あるいは老年・地域看護学臨地実

習という実習形態や選択実習扱いになっている大学を除いたためである。

3. 調査の分析

回収した調査票は、統計分析用ソフトHALBAUを用いて分析を行った。(単純集計、クロス集計) また、記述された内容については、K J法を用いて内容分析を行った。

IV. 結果

1. 大学の設置主体 (表1)

設置主体別大学数は、国立大学が11校 (45.8%)、公立大学 7 校 (29.1%)、私立大学が 6 校 (25%) であった。

表 1 設置主体別大学数

設置主体	大学数 (%)
国立	11 (45.8)
公立	7 (29.1)
私立	6 (25.0)

2. 老年看護学を担当している教員数と構成メンバー

老年看護学を担当している教員数は 1～7 名と幅があった。平均は 3 名であるが、2～4 名が最も多く 17 校 (70.8%) あった。また、構成メンバーの内訳をみると、教授がいる大学は 24 校中 14 校、2 名の教授がいる大学が 3 校あった。助教授がいる大学は 10 校、そのうち 2 名の助教授がいる大学が 2 校あった。講師がいる大学は 12 校、2 名の講師がいる大学は 2 校であった。助手がいる大学は 17 校、2 名の助手がいる大学は 4 校、3 名の助手がいる大学は 3 校であった。

3. 老年看護学臨地実習の総単位と総時間数(表 2)

実習の総単位は 2～4 単位であり、3 単位の大学が 12 校 (54.5%) と最も多かった。実習の総時間数は 80～180 時間であり、135 時間が 9 校 (37.5%) と最も多かった。

4. 実習 1 グループあたりの学生数と実習学年の学生数 (表 3)

実習 1 グループあたりの学生数は 5～26 名であ

表 2 老年看護学実習：総単位

総単位数	大学数 (%)
2	5 (22.7)
3	12 (54.5)
4	5 (22.7)
無回答	2

表 3 老年看護学実習：学生数／1 グループ

学生数	大学数 (%)
5	5 (20.8)
6	7 (29.2)
7	2 (8.3)
8	1 (4.2)
10	1 (4.2)
12	4 (16.7)
15	2 (8.3)
20	1 (4.2)
26	1 (4.2)

り、その中で、5～8 名の大学が 15 校 (62.5%) 占めていた。また、実習学年の学生数は 22～110 名であり、一番多かったのは 80 名 (33.3%) であった。

5. 実習施設までの距離 (表 4)

大学から実習施設までの距離は 4 km～100km であったが、20km 以内が 14 校 (58.3%) であった。

表 4 老年看護学実習：実習施設までの距離

実習施設までの距離	大学数 (%)
4	1 (5.0)
5	1 (5.0)
6	1 (5.0)
7	1 (5.0)
12	2 (10.0)
13	1 (5.0)
15	3 (15.0)
20	4 (20.0)
30	2 (5.0)
35	2 (10.0)
85	1 (5.0)
100	1 (5.0)

無回答 4

6. 老年看護学臨地実習の実習時期

老年看護学臨地実習を2年次に実施している大学は2校、3年次13校、4年次7校であった。また、老年看護学臨地実習を学年を分けて2回の実習を実施している大学は10校あった。

7. 実習施設と実習日数(表5)(表6)(図1～4)

老年看護学臨地実習での使用施設は、老人保健施設・特別養護老人ホーム・老人専門病院・高齢者通所サービスセンター・一般病院・訪問看護ステーション・老人福祉センター・保健所・在宅介護支援センターなどであった。中でも老人保健施設は20校(83.3%)、特別養護老人ホームは16校(66.7%)が使用していた。また、2～7施設と複数の実習施設で実習を行っているのは23校あり、2～3施設を使用している大学が12校(50.0%)、4～5施設を使用している大学が9校(37.5%)であった。

表5 老年看護学実習：使用施設（複数回答）

実習施設	大学数 (%)
老人保健施設	20 (83.3)
特別養護老人ホーム	16 (66.7)
老人専門病院	11 (45.8)
高齢者通所サービスセンター (デイ・サービス、デイケア)	10 (41.7)
一般病院	9 (33.3)
訪問看護ステーション	5 (20.8)
老人福祉センター	2 (8.3)
在宅介護支援センター	2 (8.3)
その他	4 (8.3)

表6 老年看護学実習：使用実習施設の総数

実習施設の総数	大学数 (%)
1	1 (4.2)
2	6 (25.0)
3	6 (25.0)
4	7 (29.1)
5	2 (8.3)
6	1 (4.2)
7	1 (4.2)

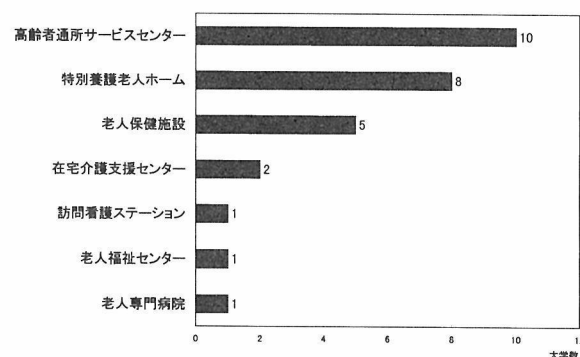


図1 1～2日の実習日数：実習施設と大学の数

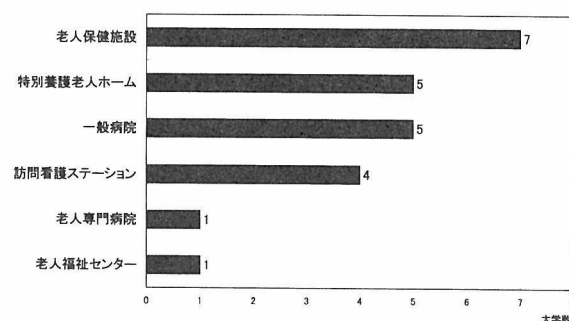


図2 3～5日の実習日数：実習施設と大学の数

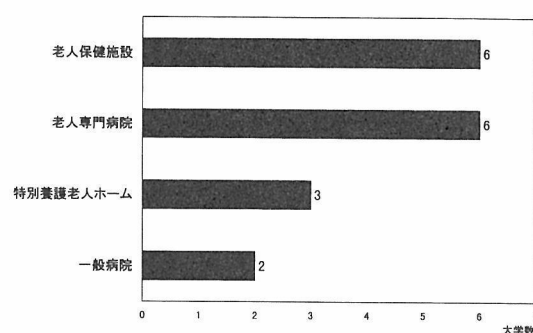


図3 6～10日の実習日数：実習施設と大学の数

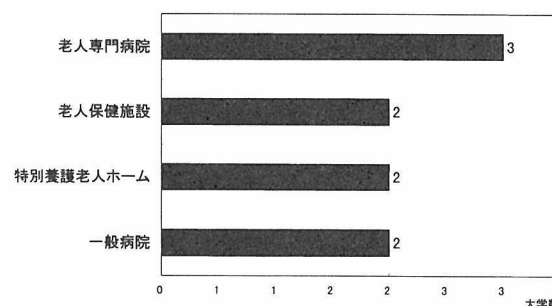


図4 12～15日の実習日数：実習施設と大学の数

施設別の実習日数を図1～4に示した。特別養護老人ホームは1～15日間であり、老人保健施設は1～15日間、高齢者通所サービスセンターは1～3日間、一般病院は4～12日間、老人専門病院

は2～15日間、訪問看護ステーションは1～5日間であった。保健所は1校のみ使用しており5日間実習、老人福祉センターと在宅介護支援センターは2校が使用しており、それぞれ1日と3日間実習、1日と2日間実習であった。

8. 学生が実習中に関わる事が可能な職種(表7)

学生が直接関わる事が可能な職種は、看護婦・医師・介護福祉士・理学療法士・寮母・ケースワーカー・作業療法士・ヘルパー・保健婦・栄養士などであった。

表7 老年看護学実習：学生が関わる事が可能な職種（複数回答）

学生が関われる職種	大学数 (%)
看護婦	24 (100.0)
医師	22 (91.7)
介護福祉士	21 (87.5)
理学療法士	20 (83.3)
寮母	20 (83.3)
ケースワーカー	18 (75.0)
作業療法士	17 (70.8)
ヘルパー	15 (62.5)
保健婦	12 (50.0)
栄養士	10 (41.7)
言語療法士	10 (41.7)
社会福祉士	10 (41.7)
薬剤師	2 (8.3)
施設管理者	1 (4.2)
その他	3 (12.5)

9. 実習指導教員数 (表8)

老人看護学臨地実習指導教員数は1～7名であり、平均3.3名であった。最も多かったのが2～3名で14校 (58.3%)、4～5名 (25.0%) のところがそれについて多かった。

10. 臨床側の直接の指導者 (表9)

24校全ての直接の指導者は看護婦であった。その他、寮母・保健婦・介護福祉士・社会福祉士等であった。

表8 老年看護学実習：指導教員数

実習指導の教員数	大学 (%)
1	1 (4.2)
2	9 (37.5)
3	5 (20.8)
4	4 (16.7)
5	2 (8.3)
6	2 (8.3)
7	1 (4.2)

表9 老年看護学実習：臨床側の直接指導者

臨床側の直接の指導者	大学数 (%)
看護婦	24 (100.0)
寮母	7 (29.2)
保健婦	5 (20.8)
介護福祉士	5 (20.8)
社会福祉士	5 (20.8)
ケースワーカー	2 (8.3)
ヘルパー	1 (4.2)
施設長	1 (4.2)
その他	2 (8.3)

11. 老年看護学臨地実習指導上の困難な事柄(表10)

老年看護学臨地実習指導上の困難な事柄については、択一選択項目と一部自由記述とした。

老年看護学臨地実習指導上の困難な事柄のうち実習施設・設備に関しては、“実習場所が分散されている”16校、“実習施設が遠隔地である”14校、“実習施設の環境を整える苦労”10校であった。教員側の指導体制に関しては“複数の施設を使用するので教員の人数が不足している”14校、“指導に専念できない”10校、“1グループあたりの学生の人数が多い”8校であった。臨床側の指導体制に関しては、“指導者によって指導内容に差がある”10校、“多種職の協力”や“指導者の協力”が得られにくい、それぞれ7校と3校であった。実習内容に関しては、“継続性を学びにくい”9校、“看護過程を展開しにくい”9校、“高齢者の特性を学びにくい”2校であった。

表10 老年看護学実習：指導上の困難な事柄

実習指導上の困難な事柄	大学数 (%)
実習施設・設備に関すること	
・実習施設が分散されていること	16 (66.7)
・実習施設が遠隔地であること	14 (58.3)
・実習施設を整える苦勞	10 (41.2)
教員側の指導体制に関すること	
・複数の施設を使用するので教員の人数が不足している	14 (58.3)
・指導に専念できない	10 (41.2)
・1グループあたりの学生の人数が多い	8 (33.3)
臨床側の指導体制に関すること	
・指導者により指導内容の差が大きい	10 (41.2)
・多職種の協力が得られない	7 (29.1)
・指導者の協力が得られない	3 (12.5)
実習の内容に関すること	
・病院や施設から在宅への継続性を学びにくい	9 (37.5)
・看護過程を展開しにくい	9 (37.5)
・実習の場の制約から高齢者の特性を学びにくい	2 (8.3)

表11 老人看護学実習の学生指導において大切にしていることの自由記述（7 カテゴリー）

<u>1. 対象の理解</u> ・個別性、多様性の理解 ・成人と老人の共通点、異なる点 ・療養の場の違いが老人へどのような影響を及ぼすのか ・生活歴、健康歴を大切にすること ・学生は老年者の行動・言動からいろいろなものをくみ取っている ・高齢者のイメージが肯定的になるように ・高齢者のイメージが多様になるように ・老化 <u>2. 高齢者に接する時の学生の態度</u> ・高齢者を尊重する態度 ・共感、受容という体験ができるように ・高齢者から学ぶ姿勢 ・できるだけ多く的高齢者と接する（コミュニケーションがとれる） <u>3. 教員としての指導姿勢</u> ・学生の個性を尊重し、創造性・感性を引き出すかわり ・医療チームの一員であるという意識を持って実習に臨むよう援助 ・学生の主体性の尊重（実習場所、クライエントの決定） ・看護観の育成	<u>4. 看護の継続性</u> ・病院から在宅への継続性について学ばせたい ・多職種との連携 ・在宅から施設へのつながり ・老人を取り巻く問題 ・社会資源の内容の理解 <u>5. 看護過程に関すること</u> ・老人看護の実践上の課題の明確化 ・看護婦独自のアセスメントと判断 ・問題解決を看護の視点でとらえる ・ケアプランの理解、作成（MDS,RAPS） <u>6. 基本的な看護</u> ・高齢者への基本的な看護技術 <u>7. その他</u> ・老人看護の原則 ・人権 ・体験を通しての学び ・学生は感性が豊かである
--	--

12. 老年看護学臨地実習の学生指導において大切にしていること (表11)

教員が老年看護学臨地実習の学生指導において大切にしていること、を自由記述とした。それをカード化し分類したところ、7 カテゴリーに分けられた。対象の理解については、“個別性、多様性の理解”“成人と老人の共通点、異なる点”“療養の場の違いが老人へどのような影響を及ぼすのか”などの内容であった。高齢者に接する時の学生の態度については、“高齢者を尊重する態度”“共感、受容という体験ができるように”などの内容であった。教員としての指導体制については、“学生の個別性を尊重し、創造性、感性を引き出すかわり”“医療チームの一員であるという意識を持って実習に臨むよう援助”などの内容であ

った。看護の継続性については、“病院から在宅への継続性について学ばせたい”“多職種との連携”などの内容であった。看護過程に関することについては、“老年看護実践上の課題の明確化”“看護婦独自のアセスメントと判断”などの内容であった。基本的な看護については、“高齢者への基本的な看護の技術”、その他であった。

13. 老年看護学臨地実習の展開で日頃感じていること (表12)

老年看護学臨地実習の展開で日頃感じていることは自由記述とし、前項12と同様に分類したところ、5 カテゴリーに分かれた。実習指導体制・方法についての悩みは、“老人の理解よりも看護過程の展開を徹底させて行うのか”“学生は、

表12 教員が実習の展開で日頃感じていることの自由記述 (5 カテゴリー)

<u>1. 実習指導体制・方法についての悩み</u> ・老人の理解よりも看護過程の展開を徹底させて行うのか ・学生は高齢者の生育過程をイメージすることは難しい ・教授方法、指導体制は教員にとってジレンマである ・人的な余裕がほしい ・老年看護学の担当教官が講師1名のみである ・教員が臨床に身をおく時間的なゆとりがほしい ・実習要項や評価表の検討が十分できていない ・もっと丁寧に教育・実習することが大切と考えている ・時間数が少ない ・基礎教育の中で、老年者の特性をふまえた実践者が育てられるのか	<u>3. 実習施設選定上の悩み</u> ・実習施設が病院等の医療機関で行うのには限界がある ・実習施設が病院（急性期）であり、老年患者の生活史を考慮して実習ができない ・病院実習に片寄りがちなので、生活の場での実習を多くしたい ・病院では多職種が同じテーブルでケアの方針を決める場がない ・現場の看護と講義のギャップ ・実習の場が地域に拡大したことに伴う問題の解決が必要（通勤・通学に伴う自己の補償、教員の通勤費用） ・老人実習に適した病院がなかなかみつからない（看護の質を落とさずに実習するとしたら）
<u>2. 老年看護学実習の特性理解の困難性</u> ・成人実習との違いを理解させることが難しい ・地域実習との役割分担が難しい ・在宅看護論実習、成人看護学実習においても対象者は老人である ・成人看護学実習の対象者も老人が多い ・老年者の特性を成人実習からさらに発展させる ・老年看護学実習が臨床から地域に拡大している	<u>4. 他領域の教員との共通認識の困難性</u> ・他領域の教員に老人看護に対する理解が得られていない ・各専門領域の教員の共通認識がもちにくい
	<u>5. 実習の有効性</u> ・実習で学生の学習が統合される ・特養、老健の実習は看護ケアにおける基礎的な理解が深まる ・特養、老健の実習は病院実習よりも学生にストレスが少ない ・基礎看護、成人看護、老人看護実習という段階的なプロセスが学生の学びに有効 ・老年看護学の核になることは何かを模索している

高齢者の生育過程をイメージすることが難しい”などの内容であった。老年看護学臨地実習の特性理解の困難性については、“成人実習との違いを理解させることが難しい”“地域実習との役割分担が難しい”“在宅看護論実習、成人看護学実習においても対象者は老人である”などの内容であった。実習施設設定上の悩みについては、“老人実習を病院等の医療機関で行うのには限界がある”“実習施設が病院（急性期）であり、老年者の生活史を考慮して実習ができない”“病院実習に偏りがちなので生活の場での実習を多くしたい”などの内容であった。他領域の教員との共通認識の困難性については、“他領域の教員に老年看護に対する理解が得られてない”などの内容であった。実習の有効性については、“実習で学生の学習が統合される”“特別養護老人ホーム、老人保健施設での実習は看護ケアにおける基礎的な理解が深まる”などの内容だった。

V. 考察

1. 老年看護学臨地実習の実態

1997年のカリキュラム改正では、各大学が弾力的に教育科目を設定できるようになり、実習施設の基準を病床規模の面からではなく、看護の質の面から規定することになり、訪問看護ステーション等へも実習施設が拡大された。

今回の調査結果から、実習施設の種類としては、9施設以上あり、ほとんどの大学で機能の異なる2施設以上を使用していた。特に老人保健施設、特別養護老人ホーム、老人専門病院を実習施設にしていた大学が多かった。これらの施設は、教員が老年看護学臨地実習の指導において大切にしている対象の理解と高齢者に対する態度を学ぶためには、総合病院あるいは一般病院など治療中心の場より、学生がその人の生活を大事にして、今までの生活歴や価値観を尊重して学習をすすめることが可能だと考える結果だろう。

特に実習施設として最も多かった老人保健施設は、患者や高齢者の生活の充実と医療の提供を図る施設であり、家庭復帰を目指しての療養生活ができること、機能訓練の提供、家庭や地域との連

携のもとサービスが行われる場である。このため、老人保健施設において学生は、生活の場（自宅あるいは特別養護老人ホームといった）に戻れることを視野に入れながら、医療・看護・リハビリテーションといった援助を中心に学ぶことができる学習の場であるといえる。

実習施設までの距離は、4 km～100 kmと差が大きかったが、20 km以内が14校（58.3%）で最も多かった。実習施設まで片道30分以内で移動できる距離は20 km位であり、それ以上になると時間がかかりすぎ教員の負担となりうる。また、老年看護学臨地実習指導上の困難な事柄の実習施設・設備に関して、実習施設が遠隔地であると15校が回答していた。このことは、特別養護老人ホーム、老人保健施設などが郊外に建てられていることや複数の施設を使用しているため移動に時間がかかり、指導時間が減少していることなどが背景として考えられる。

学生が実習中に直接関わることが可能な職種は、看護婦・医師・理学療法士・介護福祉士・寮母・ケースワーカー・作業療法士・ヘルパー・保健婦・栄養士などであった。また、臨床側の直接の指導者は24校全ての大学で看護婦と回答しており、寮母・保健婦・介護福祉士・社会福祉士等のところもあった。病院のみの実習とは違い、学生は様々な職種から指導を受け、看護専門職者と介護職者の機能や役割の違いについて学ぶ機会になっていた。

実習指導体制・方法については、“もっと丁寧に教育・実習することが大切と考えている”等の悩みが挙げられていた。このことは、1グループあたりの学生数や実習指導教員数が関係していると考えられる。さらに、1グループあたりの学生数が10名以上になると、教員は細かい指導ができにくいなどの負担を感じていた。しかし、今回の調査では、1実習施設中のユニット数を調査しておらず、“複数の施設を使用するので教員の人数が不足している”ことについての要因は分析できなかった。

高齢者通所サービスセンターでは24校が1～2日の見学実習を行っていた。通所者は、それぞれ

の健康状態や家族背景によって通所目的が違ってくるから、高齢者及び家族にとってのデイサービスの意義を学生が学ぶことが可能である。また、訪問看護ステーションは、高齢者の在宅医療の状況、家族との結びつきなどを学生が学ぶことが可能であるため実習施設として使用されているのではないかと考えられる。

老年看護の立場からは、いろいろな高齢者が生活する場を含めて、実習の場を広げていく必要がある。高齢社会になればなるほど、高齢者の多くが病院にいるというより、生活者として地域に存在するものと考えなければならない。と同時に継続看護の視点を持つことが重要である。それゆえ、デイサービスセンターや訪問看護ステーション実習を取り入れることは、学生が高齢者の在宅療養の可能性と生活の質の向上につながることを学ぶ場として、老年看護学には必要不可欠な施設であるといえよう。

2. 教員が老年看護学臨地実習の展開で日頃思っていること・大切にしていること

今回の調査で、教員が老年看護学臨地実習の展開で日頃思っていること及び大切にしていることの自由記述で一番多かった意見は、いずれも高齢者を理解させるための指導の悩みであった。老年看護学の教育内容の一つに、対象である高齢者を理解することが挙げられているが⁴⁾、青年期にある学生が、自分が体験していないライフステージにある高齢者を理解することは容易ではない。指導に当たる教員は、生活歴・健康歴を大切にすることや高齢者の個性・多様性の理解への配慮を行うことが大切と回答しており、それぞれの大学で「老年期を生きる」体験学習を取り入れるなど、教育方法の工夫により、学生の対象理解を深める機会を提供している^{6) 8) 27)}。

実習は講義や演習を通して培った老人観を深めていく場である。老年看護学臨地実習後の老人観についての研究では、老人保健施設や特別養護老人ホームでの実習では高齢者と接することで肯定的なイメージが増え、マイナスのイメージは減少するという報告もあった^{6) 13)}。また、多様な高齢

者の生活のあり方を理解させる方を重視するのか、看護過程の展開を徹底して行うのか、といった教育方法の悩みや学生が高齢者の生育過程をイメージしにくいといった指導方法の悩みもあった。従って、実習で高齢者の理解を深めさせるためには、実習施設、指導方法の検討が必要であろう。一方、片山²⁸⁾らが、実習期間が極端に短いと高齢者の特徴に関心が奪われ、肯定的イメージをもつことが難しいと述べており、学生が高齢者の理解を深めるためには、実習施設と実習期間の検討も必要である。

実習施設選定上の悩みとして、“老人実習を病院等の医療機関で行うのには限界がある”“実習施設が病院（急性期）であり、老年者の生活史を考慮して実習ができない”“病院実習に偏りがちなので生活の場での実習を多くしたい”があった。高齢者への働きかけは治療、回復のみが中心なのではなく、高齢者の価値観を尊重し、生活の質の維持向上をめざすことであり、学生がそのことに気づけるような実習施設の選定が必要であろう。

また、人口の高齢化、とくに慢性疾患をもつ重介護の高齢者の増大により、保健・医療・福祉の連携及び統合が益々重要になってくる。健康問題を含めて日常生活援助の提供を高齢者に行うには、多様な職種が多面的な連携を取ることが不可欠となる。今回の調査結果からも、“病院から在宅への継続性について学ばせたい”“多職種との連携”“社会資源の内容の理解”などの意見があった。老人保健施設や特別養護老人ホームでの実習は、多職種との関係を通し、看護の本質的な役割や機能について考える機会となり、看護についての考えが健康という広い視野の中で認識することにつながっているとの報告もあった¹⁴⁾。

老人保健施設、特別養護老人ホーム、老人専門病院などでは、看護専門職者が中心となりチームでケアしていくことになる。実習において、チーム医療の中で看護の役割、機能をどのように学ばせていくのが今後の課題である。

カリキュラム改正でも、保健・医療・福祉の連携、在宅看護・老年看護の理解を促すため、実習施設の拡大が図られたが、実習施設選定において

は多くの課題が残されており、老年看護学臨地実習をどこで行うのかまだ模索中である実態が浮き彫りになった。

3. 老年看護学臨地実習の特性理解及び他領域教員との共通認識の困難性

老年看護学臨地実習で日頃感じていることとして、“成人看護学実習の対象者も老人が多い”“成人実習との違いを理解させることが難しい”などの意見があった。これは、病院に入院中の者は高齢者が多く、成人看護学実習においても高齢者を受け持って実習することが多く、成人看護学と老年看護学との学習の区別がつきにくい現状を反映している。

野口²⁰⁾は自我発達の観点から、高齢者が「人は生涯にわたって発達し続ける」とする観点からとらえられていなかったことや看護援助も高齢者の発達を促進するという観点から論じられておらず、疾病を予防し、リハビリテーションにより自立性を回復・維持し、看護・介護するという成人期の看護にとどまっていると述べている。また、“地域実習との役割分担が難しい”“在宅看護論実習、成人看護学実習においても対象者は老人である”などの意見もあった。老年看護学臨地実習を老人保健施設、特別養護老人ホーム、訪問看護ステーション、高齢者通所サービスセンターなどで行うと、そこでも地域看護との連携や介護職者との関係が明確にならないまま実習を行っている現状が明らかになった。今回、回答いただいた大学の中には、成人看護学・老人看護学講座、もしくは地域看護・老人看護学講座になっており、老年看護学講座として独立していない大学があった。また、全国の新設大学のカリキュラムをみると、発達段階別の看護学の組み立てではなく、生活の場や活動の特性、ライフサイクルにおける看護、特定の対象及び状況における看護など様々なカリキュラム構成があり、それに伴って講座の考え方も大きく異なっていたため、回収率にも影響したと考えられる。

田島²⁾は、老年看護学の基礎教育課程での到達目標は、ライフサイクルにおける高齢者の理解を

前提にした高齢者の接し方、高齢者の日常生活行動への基本的看護技術の適応、社会における高齢者看護のあり方の理解であると述べている。高齢化が進む中、多様な対象者のニーズとそれに対する看護のあり方を学ぶためには、様々な状況にある高齢者が生活する場を含めて、実習の場を広げていく必要がある。カリキュラム改正により臨地実習の場も拡大されているが、実習における教育内容も高齢社会を見据えたものを精選し、実習施設や実習期間、実習方法を明らかにする必要がある。

VI. 結論

老年看護学臨地実習についての実態と課題について以下のことが明らかになった。

1. 老年看護学臨地実習の場所としては、老人保健施設、特別養護老人ホーム、老人専門病院を選定している大学が多かった。
2. 高齢者への働きかけは、その人の価値観を尊重し、生活の質の維持向上をめざすことにあるので、そのことに学生が気づけるような実習施設の選定が必要である。
3. 教員が臨地実習で大切にしていることは、「高齢者の理解」と「多職種との関連の中で看護の本質的な役割機能を学ぶ」であった。
4. 老年看護学臨地実習の指導体制上の悩みとして、実習場所までの距離の長さや複数の施設を使用するための教員の不足が挙げられていた。
5. 多領域の教員との共通認識が困難である。

おわりに

今回、看護系4年制大学における老年看護学臨地実習の実態と課題を明らかにすることで、当大学の老年看護学臨地実習の教育内容、教育方法を考える上での多くの示唆を得ることができた。高齢社会の中で、看護専門職者の役割と機能は、高齢者のQOLを尊重したケアを行うために、病院や施設ではもちろん地域にまで拡大している。学生が、家族を含めた高齢者に対する基本的な知識・技術や多職種との関わりの中で看護独自の機能を発揮し、効果的なケアの提供ができる能力を

修得することができるよう、実習施設、実習方法、実習時期等の検討を重ね、効果的な学習ができるように努力していきたい。

最後に、お忙しい中、アンケート調査にご協力くださいました各大学の老年看護学担当者の先生方に心より感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) いよいよ新カリへ：看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会中間報告書全文，看護教育，37 (5)，346-361，1996.
- 2) 田島桂子：看護基礎教育における老人看護の位置づけ，看護研究，27 (6)，476-484，1994.
- 3) 氏家幸子：老人看護教育の課題とこれからへの期待，Quality Nursing，1 (7)，4-16，1995.
- 4) 太田喜久子ほか：「老年期にある人々への看護」の学士課程における教育内容と方法，聖路加看護大学紀要，21，1995.
- 5) 鳴海喜代子ほか：看護学生の老人観に関する研究 (4) —病院実習および老健施設実習後の老人観の比較—，帝京平成短期大学紀要，第5号，51-55，1995.
- 6) 富田ゆき恵ほか：シュミレーションゲームによる「老年期を生きる」体験学習の効果の検討 —看護実習前後の学生の反応の分析及び展開方法の評価—，聖隷クリストファー看護大学紀要，4，29-43，1996.
- 7) 佐藤弘美ほか：老人理解のための体験学習，看護展望，18 (8)，32-36，1993.
- 8) 佐藤弘美ほか：老年期を生きることを理解するためのシュミレーションゲームの開発，千葉大学看護学部紀要，17，129-159，1993.
- 9) 松岡広子ほか：老人看護学実習終了時における看護学生の老人に対するイメージ —非好意的な印象を持った要因について—，愛知県立看護短期大学雑誌，24号，1992.
- 10) 伊藤孝治ほか：老人看護学実習の教育法の研究 —実習に伴う老人観の変化—，愛知県立看護短期大学雑誌，24号，1992.
- 11) 倉鋪桂子ほか：看護学生の老人のイメージについて，島根県立看護短期大学紀要，第2巻，9-15，1997.
- 12) 佐瀬真粧美ほか：老人保健施設実習における看護学生の老人イメージについて，帝京平成短期大学紀要第5号，45-50，1995.
- 13) 大淵律子：老人看護学実習での学び —老人福祉施設からみた効果—，東京都立医療技術短期大学紀要，第9号，157-166，1996.
- 14) 古城幸子ほか：老人看護施設実習における学生の学びと指導上の課題 —学生の実習記録の分析から—，新見女子短期大学紀要，第14巻，111-123，1993.
- 15) 野川とも江：訪問看護実習における老人看護技術の展開方法，Quality Nursing，1 (7)，34-41，1995.
- 16) 吉尾千世子：特別養護老人ホーム実習の学習成果，順天堂医療短期大学紀要，5巻，89-96，1994.
- 17) 田村やよひ：老人看護実習において学生がもちやすい問題とその指導，看護展望，13 (5)，539-543，1988.
- 18) 片山信子：老人看護学教育の検討 (その3) —福祉施設，地域医療施設別学習内容の評価—，岡山県立大学短期大学部紀要，1，57-66，1994.
- 19) 岡本玲子：老人看護実習の展開2，老人看護ぶらす介護，13 (3)，112-121，1995.
- 20) 中田智子：老人看護実習の展開，老人看護ぶらす介護，3 (1)，114-125，1995.
- 21) 沼本敦子ほか：老人看護学の概念枠組みと授業内容 (その2) —老人看護実習の評価に焦点を当てて—，聖隷クリストファー看護大学紀要，4，1996.
- 22) 佐藤重美ほか：特別養護老人ホームにおける看護の役割を学ぶ，臨床老年看護，5 (2)，65-70，1997.
- 23) 吉村啓子ほか：医療施設における高齢者の看護を学ぶ —S病院における実習の展開—，臨床老年看護，5 (3)，66-71，1997.
- 24) 伊藤順子ほか：老人保健施設・高齢者クラブにおける実習展開，臨床老年看護，5 (4)，61-67，1998.
- 25) 鳴海喜代子：看護課程の展開ではなく，老人との接触を中心に，看護展望，17 (2)，164-167，1992.
- 26) 森沢康他：高齢者地域看護活動論，メデカルフレンド社，50-59，1997.
- 27) 佐藤弘美他：老年期を生きることを理解するためのシュミレーションゲームの効果について，千葉大学看護学部紀要，vol15，1993.
- 28) 片山信子他：老人看護学教育の検討 (その2)，岡山県立短期大学紀要，36，184-190，1991.
- 29) 野口美和子：老人看護学再考—自我発達の観点から，

- Quality Nursing, 3 (10), 4-9, 1997.
- 30) 金川克子：老人看護実習の場をめぐって，看護展望，13 (5)，534-538，1988.
- 31) 「看護教育」編集室編：新カリキュラムの改正ポイント，医学書院，35-38，1996.
- 32) 高崎絹子ほか：老人看護学の理念と教育の展開，Quality Nursing 1 (7)，17-33，1995.

Currents status and future issues concerning practical Geriatric nursing training in nursing universities

SHIMIZU Hatsuko, MITO Mitsuko, SASUGA Yuriko

Yamanashi College of Nursing

Summary

The purpose of this study was to clarify the current status and future issues of practical geriatric nursing training in nursing universities. A questionnaire to be sent and returned by mail was designed for this purpose. The subjects were instructors of practical geriatric nursing training. The following results were obtained.

1. Geriatric health facilities, special nursing homes for aged, and geriatric hospitals were the most common institutions selected for practical geriatric nursing training.
2. Since nursing students must motivate the elderly to maintain and increase their quality of life while respecting individual values of life. It is necessary to select institutions for practical training where nursing students can perceive the motivation.
3. Faculty members consider it important to “understand the elderly” and to “learn the essential role of nursing while working with members of other professions.”
4. The small number of faculty members hampers guidance in regard to practical geriatric nursing training because the institutions selected are some distance away and several institutions must be utilized.
5. It became evident that it was difficult to share the same awareness with faculty members in other fields.

Key words: practical geriatric nursing training, institutions for practical training, quality of life, understand the elderly, collaboration with other professions